

第7期 第2回一般廃棄物減量等推進審議会 議事録

日時：平成31年3月26日（火）14：00～

場所：千代田区役所8階 第2委員会室

- 1 開会
- 2 委嘱状交付
- 3 議題
 - (1) 第4次千代田区一般廃棄物処理基本計画の進捗状況について
 - (2) その他
- 4 閉会

◎ 配付資料

- 資料1 第7期千代田区一般廃棄物減量等推進審議会 委員名簿
- 資料2-1 第4次千代田区一般廃棄物処理基本計画
- 資料2-2 第4次千代田区一般廃棄物処理基本計画（概要版）
- 資料3 ごみ量及び資源化率の推移
- 資料4 ごみ・資源の組成分析調査報告書
- 資料5 環境省中央環境審議会循環型社会部会プラスチック資源循環戦略小委員会
会議資料
- ・「プラスチック資源循環戦略（案）」
 - ・「プラスチックを取り巻く国内外の状況」（抜粋）
- 資料6 第7期第1回千代田区一般廃棄物減量等推進審議会議事録

伊藤所長 お待たせしました。それでは時間になりましたので、審議会のほうを始めさせていただきます。本日はお忙しいところご出席いただきましてありがとうございます。

私は、千代田清掃事務所長の伊藤と申します。年度末の開催ということで、大変お忙しいところで申し訳ございませんが、よろしく願いいたします。

それでは、まず初めに、本審議会委員に交代がございましたので、委嘱状の交付をさせていただきます。中山卓様。

中山委員 はい。

伊藤所長 任期は、本日平成31年3月26日から12月17日までです。部長から委嘱状の交付をお願いします。

（拍手）

中山委員 私は、岩本町一丁目町会の町会長をやっている状態で、今回連合町会長ということで、このお仕事が来たかと思いますが、神田清掃協力会の会長もやらせていただいております。ごみに関しては新しいマンションの人たちとか、いろいろ問題がありますので、一生

懸命頑張るつもりです。よろしくお願いいたします。

伊藤所長 ありがとうございます。本日所要があるために、あいにく欠席となっておりますけれども、麴町清掃協力会顧問、高梨幸彦様も本日からのご就任となりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、本日の配布資料の確認をさせていただきたいと思います。お手元の資料、確認をお願いいたします。まず、1番目に次第。それから、資料1として委員名簿。資料2-1として第4次千代田区一般廃棄物処理基本計画。資料2-2として、第4次千代田区一般廃棄物処理基本計画の概要版。資料3として、ごみ量および資源化率の推移。資料4として、ごみ資源の組成成分調査の報告書。資料5として、環境省中央環境審議会、循環型社会部会プラスチック資源循環戦略小委員会会議資料。プラスチック資源循環戦略（案）と、プラスチックを取り巻く国内外の状況（抜粋）となっております。資料6として、第1回の審議会の議事録を付けております。資料の不足のほうはよろしいでしょうか。

ありがとうございます。なお、議事録は公開が原則となっております。その点をお含みおきいただいた上で、何か修正箇所ございましたら、事務局までご連絡をいただければと思います。座長の了承を受けて、ホームページ等で公開することとなりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、ただいまより第2回の審議会を開会したいと思います。崎田座長、よろしくお願いいたします。

崎田座長 皆さん、お待たせいたしました。

今日久々の開催ということですが、今日の内容的には、今、区のほうでしっかり取り組んでくださっている状況の進捗をお伺いして、皆さんからの意見をいただくという、そういうかたちになっておりますので、ぜひいろいろ忌憚ないご意見などいただければと思います。

それでは会議を始めたいと思っておりますけれども、一応、審議会の規定により、委員の過半数が出席しないといけないということになっておりますので、定足数の確認をお願いしたいと思いますが、一応、今日の審議会、高梨委員から欠席というご連絡をいただいているということで、6人で過半数が4名ということですので、本日は有効に成立しているというようなことでスタートしたいと思います。

現在14時ですので、一応16時を目途に終了したいと思いますので、いろいろご意見いただければありがたいと思います。

それでは、議題に入って、最初の議題の第4次千代田区一般廃棄物処理基本計画の進捗状況ということで、事務局からご説明をお願いしたいと思います。

伊藤所長 それでは、私のほうから資料の3、ごみ量および資源化率の推移と、資料4のごみ資源の組成分析調査報告書、2点使ってご説明をさせていただきたいと思います。

まず資料3のごみ量および資源化率の推移のほうをお手元にお出しさせていただきたいと思っております。こちら、平成21年度から29年度までのごみ量、資源化率の推移の数字を示したのになっております。まず、一番上の行、区が収集したごみ量Aと書かれているところでございますけれども、第4次のこの基本計画の中期目標、平成33年度目標としては、1万4,966トンという目標を立てておるところですが、29年度につきましては、1

万5, 782トンという数字になっております。傾向としましては、見ていただくとお分かりかと思いますが、21年度からだんだんと減ってきております。区が収集しているごみ量、この部分については減っている傾向が、この数字からも読み取れるかと思っております。

次、持込ごみ量B、こちらの数字、中期目標としては、5万6, 468トンということなのですが、29年度、こちらは7万57トンという数字になっております。こちらは持込ごみ量、いわゆる事業者さんが民間の事業者さんと契約して、清掃工場に持ち込んでいるごみのことを言っておりますが、減る傾向にあったのですが、若干増えて、横ばい状況という傾向にあるということが数字からは読み取れる状況になっています。

このAとBを足したごみ量の合計Cですが、こちらも徐々に減ってきていると。ただ、最近横ばいになっている状況です。次に、この下の区が回収した資源で、これは資源のほうですが、平成33年度の目標としては、5, 815トンというふうに目標を立てておりますが、29年度は4, 110トンという数字になっております。こちらの回収した資源についても、こちらが資源回収でございますので、徐々に増えていきましたが、最近3カ年ほど横ばい状況になっているところでございます。

次は、ちょっと飛ばして下のほうにいきますが、集団回収した資源Eの数字ですが、中期目標値としては、1, 150トンで、目標値を立てていますが、こちらの集団回収の資源については、年々増えてきております。集団回収している団体のほうも、今、110を超えているというところで、年々団体が増えてきている状況もありますので、こちらは順調に推移しているのかなと考えております。

その下の事業系の資源Fですが、こちらは中期目標としては、12万7, 403トンということで目標を立てておりますけれども、29年度は11万5, 568トンで、増えたり減ったりという傾向はあるものの、おしなべていくと、ほぼ平行になっている状況かなと思っております。

下のほうの資源量の計、Gの中期目標としては13万4, 368トンというところですが、29年度は12万677トンで、増える傾向にあるかなと見ております。

ごみ資源の総量Hの中期目標としては20万5, 802トンという目標値を立てているんですが、29年度が20万6, 516トンという数字になっております。ごみ資源の総量としては増えているという状況です。

最後、資源化率、一番最後の行ですが、中期目標値としては65.3%を目標としていましたが、29年度につきましては、58.4%という数字になっております。

資源化率は、21年度から徐々に上がってきていて、26～27年頃からちょっと横ばい状況になっております。

参考に、表の下部に記載の蛍光管、インクカートリッジの数字も出させていただいております。蛍光管は、今年の4月1日から収集方法を変えて、燃やせないごみとは別に収集を行うと。これは水俣条約の関係で、水銀含有物である蛍光灯が埋め立て処分場に埋め立てできなくなるということで、資源化処理をしなくてはならないということで、処理の方法を変えているということで、載せていただいております。

続きまして、資料の4の「ごみ資源の組成分析調査」のほうをご覧いただきたいと思っております。こちらの6ページをお開きいただきたいと思っております。昨年10月に組成調査のサン

プル調査を行った結果を出している表でございます。簡単に説明させていただきたいと思
います。

家庭系の燃やすごみですが、「残飯・調理くず」が一番多く、26.4%。その次に多い
のが資源物の「紙類」が入ってきています。

その次が「その他紙類」という組成割合になっています。本来の燃やすごみとしては、
64.5%の組成ということになっています。

続きまして、8ページをお開きください。家庭系の燃やさないごみの組成割合について
一番多いのは、「その他、鉄類」で、14.8%。2番目に多いのが「燃やすごみ」がで、
12.9%、続いて「陶磁器、石等」が入ってきているという状況です。燃やせないごみ
の中に、まだまだ燃やすごみが入ってきている状況が見て取れると思います。

続きまして10ページをお開きください。プラスチックの組成割合です。こちらは、「容
器包装」が56.1%多く占めていて、「容器包装以外」が14.2%というかたちになっ
ています。こちらはプラスチックということで、「容器包装」が過半数を占めているという
状況が、見て取れると思います。

次に12ページをお開きください。家庭系の資源です。「紙類」が46.2%、「飲食用
のびん」が26%という数字になっています。ほぼ資源として扱われるものが入ってきて
いる状況となっています。

続きまして14ページをお開きください。こちらは事業系の燃やすごみの組成割合とな
っています。紙類が39.9%ということが多くなっています。資源回せる紙類なのですが、
燃やすごみの中に入ってきています。その次に多いのは、残飯・調理くず等の29.
8%ですが、事業系の紙類の分類のほうが、ちょっと問題かなというところが、見て取れ
ると思います。

続いて16ページをお開きください。事業系の燃やさないごみの組成割合です。陶磁器・
石が35.6%ということが一番多いのですが、資源に回せる飲食用の缶も25.7%も、
燃やさないごみに入ってきているという状況は見て取れます。

続きまして18ページをお開きください。事業系のプラスチック組成割合ですが、容器
包装が54.4%と一番多くなっております。ただ、2番目として多いのが、燃やすごみ
17.1%というかたちになっています。

それから20ページのほうをお開きください。事業系の資源ですが、紙類が64.3%
と大きな部分を占めています。飲食用のペットボトルが15.1%という数字で続いてお
ります。

家庭系、事業系のそれぞれの組成割合について簡単にご説明をさせていただきました。

組成分析の考察は、35ページをお開きいただきたいのですが、今回サンプル調査で、
傾向を調べています。図表3-2、一番下の表の調査地域全体の排出原単位ですが、燃や
すごみから資源まで、1日あたり606グラムとなっております。これは、平成25年度
の数字は900グラムでしたので、1人あたりの排出量は減っているといえます。

千代田区の人口が増えているのですが、ごみ量のほうは減ってきているという状況です。

37ページをお開きください。過去の調査との比較で、特徴的なところは家庭系の燃や
すごみの中の図表3-4の分別区分の燃やすごみの厨芥ごみは、ですが、組成割合として、

平成24年度から平成30年度まで推移を追ってみますと、年ごと減ってきているということが見て取れます。

あと、この上の分別区分としてはプラに入ってきているのですが、容器包装についても、当初平成24年、0.6%だったのですが、28年度はちょっと数字が上がってきてしまっている状況です。

それから41ページのほうをお開きください。事業系の燃やすごみについて、本来資源として扱っていただきたい紙類です。これ、一番行の上に出ていますけれども、組成割合としては年々減ってきている状況です。ただ、ちょっと30年度については、29年度に比べて割合が急に高くなっているというような状況ですが、燃やすごみに入ってくる紙類は本来減る傾向にあるというふうに捉えています。

簡単ですが、私のほうからの説明は以上でございます。

崎田座長 ありがとうございます。最近の組成調査も含めたお話がありました。それでは、意見交換の前に、今の状況の理解のために、ご説明いただいたところの質問をお受けしたいというふうに思っておりますが、その入口として私のほうから、資料3のごみ量および資源化率の推移という、この基本の表の理解に関して、ちょっと確認をさせていただきたいのですが。今取り組んでいただいている、第4次千代田区一般廃棄物処理基本計画での目標にしているところは何かを再確認したいのですが、概要版P4の下段に書いていただいているところですよ。

伊藤所長 はい。

崎田座長 ここの何を目標にしていたかというところと、その現状について、もう一度お話しいただけますか。

伊藤所長 はい。目標としては、この中期目標、ごみの排出量を約7万1,500トンにするということ。27年度と比較して1.7倍に削減するということと、資源化率を65%にしていくということで、27年度の数字から7ポイント上げていくという目標を掲げて取り組んできています。

崎田座長 ということは、このごみ排出量の目標値は、資料3の表内のごみと資源の総量Hではなくて、上のごみ量合計のCが目標になっているという理解でよろしいですかね。

伊藤所長 はい。

崎田座長 Cのグレーの斜線で引いていただいているCの図。これが中期目標の7万。

伊藤所長 7万1,434ですね。

崎田座長 1,434トン、これが、中心的な指標の数字で、これに関しては、29年度は8万5,000ですから、少しずつ減ったけど横ばいになっているという状況ということですね。

伊藤所長 はい、そういうことです。

崎田座長 それから、ここが33年度までに、この数字(71,434トン)に行くのはどう捉えて。今のままだと、ちょっと難しいという理解でいいですかね。

伊藤所長 今、もう一步必要な状況であります。

崎田座長 これからの話の基本を皆さんと共有したいと思ひまして、すいません。

ということで、少しずつ減っては来ているのだけれども、ここ3年間ぐらい下げ止まり

で横ばい状態という、もう一步ごみ量削減に努力しましょうというところと、指標がもう一つありますが、資源化率65%を目指していたと。これに関しては、資源化率は一番下の資源化率。

伊藤所長 G/Hのところですか。

崎田座長 G/Hというところは、65.3%というのが目標で、現在58.4ですね。これに関しては、徐々に増えてきてはいるのですが、この状態で達成できるという読みでいいのか、もうひと頑張りなのか。

伊藤所長 これはさっきのごみ量に比べて、資源化率のほうはいいのですが、もう少し努力が必要かなとは思いますが。

崎田座長 ありがとうございます。先ほどご説明があったように、千代田区は今、人口が増えている状況ではあるが、ちゃんと減少傾向にはある。ですから、いろいろ区民の皆さんや事業者も、それなりに取り組みはしていただいているという理解でいいと思うのです。ただし、目標としたものは、ごみ量の総計はもうちょっと少なく、そして資源回収率も徐々に進んできているけれども、もう一步しっかりやるというところを、私たちは目指しているはずだという理解で皆さんから、この後、ご意見をいただければと思うのですが、ご意見のところに行く前に、この数字(資料3)のところ、何かご質問とか特にありますか。

庄司委員 この表の中で、資料3ですが、事業系の資源Fというのがありますよね。

伊藤所長 はい。

庄司委員 これは、あらためて今ごろ確認して申し訳ないのですが、区が回収した事業系の資源ということですか。

伊藤所長 はい。

庄司委員 そうですね。この回収方法は、通常の区民から出るのと同じ場所で、事業系で出してもらって。

伊藤所長 事業系です。

庄司委員 それで一緒に、同時に出してもらって回収しているということですね。

伊藤所長 はい。

区関係者 Dに関しては集積所で回収したもので、今ご質問のあった事業系の資源Fなのですが、再利用計画書というものを、年に1回1,000平米以上の事業系のビルを含む建物からお出しいただいているその実績の積み上げの数字ですね。

庄司委員 すると、これは実態の数字じゃなくて、一応推計ということですか。

区関係者 そうでございます。

庄司委員 そうすると、このDの中には事業系から出た資源も入っているってことですか。

伊藤所長 小規模事業者が区の集積所に出している場合は、有料ごみ処理券に基づいて含まれております。それが、区民と区の事業系が合わさった数字(D)が29年度ですと4,110トンになります。

庄司委員 では、この中には事業系も入っているということですね。

区関係者 はい。

庄司委員 そうすると、資源化率の事業系は、ここでは分けてあるのですか。4, 110トン、それぞれ家庭系と事業系と分けているのですか。

伊藤所長 それは、組成調査内では分けております。資料の報告書のほうについて、家庭系の資源の組成割合というかたちで、割合と重量を出してございます。13ページが家庭系の資源の割合。21ページに事業系の資源の割合で、これが区の収集になっている割合でございます。この割合の数字の合計が、4, 110トンです。組成割合についてはサンプル調査になっておりますけれども。

庄司委員 説明で分かりましたけれども、何でこんなこと確認しているのかというと、特に千代田区は、事業系と家庭系の比率が、他の市町村と比べても決定的に違うので、例外中の例外みたいなものですからね。その区において、こういったデータをやるときに、事業系と家庭系をきちんと分けないと、今後の施策を進めていく上では、たぶん参考値にならないのだろうと思うのですね。そういう意味で、全体として、そうすると資源化率の中には、事業系も含めて当然、G/Hですから、当然この中には事業系、全体の中では入っている。ただ、個々的には、事業系と家庭系についての資源化率は、出せるのだけでも出してはいいないということですね。

伊藤所長 それは、グリーンの冊子の5ページの右下をご覧いただきたいのですが、ここで家庭系と事業系の資源化率を出してございまして、今の計画を作ったときに、ご案内のとおり、家庭系の資源化率が極端に低い。これは我々も課題と認識をしております。この組成の資料のほうには出ていませんでした。実態はこういうかたちになってございます。

庄司委員 数字的にきちんと区のほうでは把握されているということは分かりました。

崎田座長 今、ご質問いただいた点で、自治体回収をしている小規模事業者を含む事業系と家庭系との割合は、何%という感じですかね。

庄司委員 9割前後でしょうね。

崎田座長 事業系が、総量から言えば9割。

庄司委員 国レベルのデータからいけば、3分の1が事業系なのですが、千代田区の場合は、9割方が事業系ということですよ。

崎田座長 そうですね。割合から言うと、かなり超都心地域ということで、

そういうことを考えながら、やっていかなければいけないということで、ありがとうございます。

資料3の理解と全体の理解は進んでまいりました。次にご説明いただいた組成分析調査の報告書で、今、特徴的なところをご説明いただきました。この組成調査をやってみて、どこが課題かというのが、これで見えてきて、いろいろ皆さんお気づきのところがあると思いますので、この組成調査の質問とか、何が課題と思われるかと、そういうような点に関して、ご意見をいただければありがたいと思います。それをどう解決するのかは、後半でお話をしていければなというふうに思います。

まずは、質問なり課題なりについて、ご意見をいただければ。

庄司委員 組成調査の6ページから偶数ページで出ているグラフ、これを基に見ていますが、ぱっと見て、1つこの点を念頭に置いとかないと、この数字だけでは、具体的な施策が出しにくいかなと思う点が、例えば6ページで、プラスチックが、汚れあり、汚

れなしの2種類あり、汚れありは、3.8%となっていますよね。事業系では、もっと低い2.9%ですね。これはあくまで重量比なわけですよね。重量比でいくと、例えば、このグラフの飲料びんが、わずか0.3%ですよね。プラスチックの3.8%は、国の審議会等の資料の出し方からすると、かさを関連したごみ量で見ると、2倍強です。2.5倍から3倍ぐらいあるのですよ。そのことを考えると、13~14%ぐらい、比重で比べると、その辺を前提にして、数値を見ないといけないと。

ただ、これいちいち換算して、こんな資料を作ったら大変なのですが、こういうデータのとときに、あまり細かく、そんなことを通常見たときにぱっと意識されないのですね。「あっ、プラスチックは意外に少ないな。でも、常識的に軽いからこんなもんだろ」と、ざっと飲みますけれども、その辺はこういうデータのとときに、注意書きに、入れておく必要があるのではないかと思います。

そういう点を考えて、この組成を見て、施策を考えていかなくちゃいけないのかな。そうすると、事業系のほうが、割とプラスチックの重量が結構出ているのですよ。資源としてここで見るとね。家庭系は少ないのですよね。だから、その違いはどうか。

一廃に産廃まで含めれば、事業系ごみも、産廃の方は、リサイクル率は50%超えていますから、国のデータでは。通常的生活系ごみに比べても資源化率は倍以上です。ですから、事業系のリサイクルがしやすい。出るごみの種類が限定されているから、紙とプラスチックと、あとびん、缶ぐらいしか出てこない。生ごみなんか出てこない。分別もしやすいのですよ。

しかも、同じように同種のものがば一っと出ますからね。産廃なんか特にそうですが、当然、リサイクル率は分別しやすい意味では、もっと高くなってもいいぐらいですよ。これはデータ的にごみ量を抑えるのは結局、重量比でしか抑えられないので、国としても技術的に非常に難しいので、そんなことを承知で重量比でしか出してないのですが。

これはどこでも共通していますけども、きちんと念頭に置いて施策化していかないと、効果上がっていきにくいのかな。

ごみ量も資源化率も横ばいですよ。ですから、こういったことも、まんざら関係なくはないように思いますし、その辺がちょっと気になるころですね。

崎田座長 今、庄司委員からお話がありました。例えば6ページの図を見ていただければと思うのですが、この中で、内側の家庭系からの燃やすごみの組成割合ですが、内側の円で、右上に資源、左下に燃やすごみというふうを書いてあって、家庭系の燃やすごみとして出ている中に、資源にきちんと分けてくれれば出せるものが、まだこのくらいはありますよ。たまたま紙類というところが、資源になっていますけれども、右側のプラスチックは、資源として出せるものが7.7%混ざっているというような意味合いで、左の上のプラスチック汚れありという、これは燃やさなくてはいけないものかもしれないけれども、そういうかたちで出ているというもの。両方に分けて、きちんと出しているという理解でよろしいですかね。

伊藤所長 はい。

崎田座長 それで、今ご発言あったのは、このプラスチックというのは、かさで見ると、もっと非常に割合が高くて、この数値で見ると少なく見えるけれども、もっと真剣に取り

組まなければいけないのではないかという御提案で、プラスチックに関しては、非常に大きな問題というふうに思っています。

後ほど、プラスチックに関して、少し資源戦略の話し合いなどが進んでいますので、どんなことが話し合われているのかを、情報提供させていただこうと思っています。

今、プラスチックに関する課題について、ご発言をいただきました。この後、この図から考えても、紙類でまだ資源に出せるものが、家庭系だけ見ても21%あるわけで、燃やすものに出している紙類を、もっと資源化できるのではないかということも課題かなと思います。今、社会で食品ロス削減が大変重要課題になっていますが、この残飯の中で、明確に食品ロスと位置付けられるのは、この未利用食品・食材、1.8%という理解でよろしいのですかね。

伊藤所長 そうですね。ここで言っている、未利用のところの食材が、大きなところになります。ただ、未利用ではなくても、まだ使える食材。野菜とか、そういったものは、この中に入ってきてないので、それをプラスアルファしてという感じです。

崎田座長 普通、食品ロスに関する統計は全体ですので仕方ありませんが、食品ロスに関する、生ごみの統計は、ここの未利用食品・食材と、あと調理くずとかそういうものと、食べ残しという、そういう感じで分けてやったりしています。ですから、この今、残飯・調理くず等のかかなりの部分も、きちんと調理の量を考えることで、もっと減っていく可能性があると思います。

今、私がこの家庭系についての表でお話をしましたが、先ほど庄司委員は事業系のほうが、もっと減らしやすいのではないかと。

庄司委員 だから、全体の問題としては、そういうことは頭にあります。

今の組成の関連で、崎田会長が発言になったことで、6ページの残飯・調理くず等となっていますが、千代田区では、いわゆる最近問題になっている食べ残しを含めて、未利用食品の問題は、何か組成分析はされていますか。

伊藤所長 組成分析自体は、まだ、やっていません。

庄司委員 一部の区では最近やっていますね。私の知っている練馬区で、もう3年ぐらい継続してやっています。私も1回見せてもらったのですが、この食品残渣ほど、その組成をやるとなったら、これまた非常に難しいですよ。大ざっぱに不可食品と可食部分とか何とかいろいろ分けて、環境省でも組成分析なんか、一応、マニュアルまではいかないですけど、大ざっぱなそういう区分は出していますが、実際に、未利用食品は、何をもって未利用とするかっていうのは、本当頭の中であんまりそこまで考えてなかったのですが、現場行って見て、未利用って何。つまり腐ったもので、食べられたものを腐らせちゃって食べられなかったものなのか、調理残渣として残したものなのか、食べ残して残したものなのか。これは性質が全部違うのですよね。

だから、練馬区を見ていると、そこまできちんと分けないと、実際にその未利用食品が、正確に把握できないですよ。例えば野菜のしっぽをちょこんと、本当のしっぽ切り切ったのと、真ん中ぐらいで、もう食べられないで出したのか、これによっても随分捉え方が、どっちに区分するかは変わってくるぐらいで、あれは、本当にやる人の主観で随分変わるので、組成分析は、その辺の誤差の範囲が相当大きいのではないかなと。

データでいろんなところを出していますけどね。だから、やってやれないとまでは言い切れないのですが、やるのは難しいなとは思っています。ですから、こういった未利用、くずって言っても、もったいないなというのではなくて、今、本当に食品残渣の見直しを、プラスチックの問題と、もう一つ、家庭ごみも含めて、生ごみの中で大きな課題になっていますから、この辺も千代田区としても、あるいは、各区でやっても、そんなに区別に特に大きな違いはないと思いますので、23区共同でやっていく時期ではないかなというふうに思います。その辺の数値の捉え方はこれから必要だと思います。

崎田座長 このデータ、確かに全国平均でいうと、燃やすごみのうちの生ごみというのが4割。大体4割ぐらいが平均で、その4割のうちの4割。だから $4 \times 4 = 16$ 。16%ぐらいが食品ロスとして、まだ食べられるのに捨てられているという、そのぐらいの感じになるのが、いろいろ全国的に調査しているのが平均かなと、そういう感じがします。

未利用食品は、燃やすもの全体の1.8ですから、実際に今、庄司委員のように、ご発言のように、この調理残渣物みたいのところまで、しっかりとそういうことで分けていくと、もう少し食品ロスとして、私たちの暮らしの見直しとか意識の改革で減らせるものも、増えてくると、そんな感じかなと思います。

それでは今、この組成調査の表などで、やはりこの辺は問題ですよねというようなご意見が、もしあれば。

窪田委員 千代田区は今、区民がすごく増えています。だからトータル的に考えれば、ごみは減るのかなという感覚はあったのです。実際に横ばいっていう、人が増えた割にはごみとしては増えてないことが、すごく分かりました。

その中で、今、資源化しようと、資源として取り出す紙だとか缶とかびんだとか、ペットボトルですよ、千代田区では大まかに分ければ。それを区民のほうからリサイクルにより協力してもらって、この割合を増やそうというのが1つと。

それから、今、燃やすごみになっているものの中から、さらに資源化する項目を増やしていくのか。割と区民は分別が面倒臭いっていうけど、千代田区の分別は面倒臭いっていう段階ではないと、すごく簡単な分別だろうと思います。その難しくしろということではなくて、今、ごみにしてもいいよって言っているものの中から、まだ引っ張り出せるものがあるのではないかっていうふうな感覚がありました。以上です。

崎田座長 今の窪田委員のご発言を確認させていただきたいのですが、2つの視点とおっしゃったのは、市民の分別をもう少し丁寧にして、しっかり資源化する方法と、今のままで、もっと区民がしっかり分けていく方法と2つあるという、そういうことですね。

窪田委員 はい、そうです。

崎田座長 今のままでしっかりとやるのか、もっと分けるのかという。

窪田委員 はい。

伊藤所長 今の関連で、千代田区で試験的な取り組みとして、青空相談会をやっていて、清掃の職員が地域の施設や公園に出向いて、分別についての相談等を受けて、回収できるものは回収して、また回収できないものはどういった方法で対応したらいいかをやっている状況です。その積み上げで、先ほどの窪田委員が言われた2つの考え方で、どうやっていったらいいか、ちょっと今、データを積み上げさせていただいているということです。

崎田座長 分かりました。きっとどこも、繊維、いわゆるお洋服の回収、いわゆるリユースショップに持っていかないで、取りあえずお洋服の回収、どっかでやってないかなというのを、結構いろんな方が気にしておられて、私も身近でそういう運動を一生懸命やっているグループがあるのです。取りあえず多くの方に声を掛けてやると、3～4時間で1トン集まっちゃう。

窪田委員 そうなのですよ。

崎田座長 そう。それをどう持ってくかを、最初にその仕組みを作ってから呼び掛けるのが大変で、そういう状況ですので、どこも大変だと思います。

それでは、このデータに関して、金藤先生、何かコメントありますか。

金藤副座長 最初の資料3でいいですか。

崎田座長 はい、いいです。現状に関して。

金藤副座長 今ちょっと、ぼちぼちぼちぼち、電卓機能ちょっと計算していたのですが、資源化率は、基本的に上げるものだというふうに考えていると、この公式で考えていくと、恐らく資源量の合計というのは、これは、とにかく上げることが必要なのか。ごみと資源の総量というのがHなのですが、これは、Cの部分を下げれば、たぶん資源化量は、おのずと上がっていくのかなと思うのです。なぜかという、両方にも、分子にも分母にもGが入っているので、逆にGの部分を減らすと、全体的に資源量って資源化率がちょっと減っちゃうのですね。

崎田座長 でも、資源の量全体がGなので、資源化率を出すときにはGがないといけないのですよね。

金藤副座長 そうです。ですので、Cの部分が、要するに資源化量のところの合計がGですよね。

崎田座長 はい。

金藤副座長 ごみと資源の総量の中には、右辺のほうにGが入っていますよね。H = C + G。

崎田座長 ごみと資源の総量分の資源が何%かが、資源化率なので。

金藤副座長 ごみを全体に減らすのか、そのまま維持していくのか、増えていくのか分かりませんが、もしGの部分が例えば1万トンや2万トン減ると、分母の部分にも数字が反映しますよね。

そうすると、今ちょっと計算していたのですが、どんどん実は、その資源化率が下がっていくのですよ。パーセンテージが。そうすると、資源化率を上げるという目標を立てているのであれば、何が必要になってくるかという、単純に資源化量の合計のGを上げていくか、それとも、ごみの資源の総量のCの部分を、つまり、ごみの合計量を減らしていくかぐらいしか、ないというふうに、計算をしていたのですが、そういう理解でいいですか。

伊藤所長 千代田区としては、当然今、金藤副座長言われたとおり、まずはごみ量の減少を考えていきたい。それと併せて、資源化を上げていきたい。

金藤副座長 ですよ、上げていくのですよね。

伊藤所長 その両方を兼ねてやっていきたいというふうに考えているところなのです。

だから、表の見方としては難しくなってしまうのですけど。

金藤副座長 ちょっと時間がたって、こういうところに関わっている方に、いろいろちょっとお聞きしたことがあって、ごみを減らすことは、区としてはたぶんいいことだと僕は思っているのです。

ただ、実際にこれに関わっている人から話を聞くと、あんまり減らしてほしくないっていうふうな話もちらっと聞いたことがあるのです。というのは、要するに関わっている方が多いので、物理的に減らすのは無理なのではないか。こういうところで、そういうこと言う必要性ないのかもしれないけれども、だから、何が言いたいかというと、ここで話す議論というのは、何でもかんでも減らせっていうことではなくて、最適解を明確にしといたほうがいいのではないかとというような、そういうことです。パーセンテージでも、どんどん資源化量上げればいいということだとか、ごみの量を減らせばいいという、一方的な議論ではなくて、たぶん、基本方針でも、恐らく平成33年に中間報告して、最終報告するというので、段階的には考えて入るのでしょうけど、そうかと言って、それが最適解っていうわけではないのではないかって、僕はちょっと思っています。

要するにごみの問題というのは、やはりそういった関わり業者さんいれば、特に区民の意識も、高ければ高いほどいいと思いますし、ごみを減らさなければいけない。あとコストの問題もあるので、そういったものを総合して、一番の最適解を考えていきつつ、そこに向かって我々は、何か施策を考えていく必要があるのではないかなって個人的に思っています。だから、ごみを減らすための最適解ではなくて、ごみを減らすだけではなくて、いろんなものを総合して考えていったほうが、僕は効果があるのではないかと思っています。

崎田座長 先生がそういう、急にごみを減らして、仕事をなくす人もいるとかで、経済原則で言えば、きっとそういう現実のいろんな方からの声を聞いて、どういうふうにしなごらいくのかが、先生、すごく真面目に考えてくださっているのだと思います。

先生のようなご発言が大事なのだというふうに思っております。ただし、ここで今、話しているのは、例えば、いわゆる今、東京23区は最終的に、燃やすごみ、あるいは燃やさないごみと、その焼却灰に関しては、中央防波堤の外側の新海面処分場に処分しているわけですが、それが今のままだと、あと50年で満杯になって、それより後の処分場は、東京にはないと。

そのときには、東京都民はどうするのかを考えれば、他のところをお願いをするとか、逆に他のところにはもう、ほとんどないとか、産業廃棄物の分野では、もう東北地方のいろんなところにお世話になっていたりするので、はっきり言うと、私たち自身が、ごみの排出量、炭素が脱炭素の時代ですので、ごみも最終的に出さないぐらいの大胆な、それで出して燃やしても焼却灰は全部資源化するとか、とにかくそういう状態に、これから10年、20年ぐらいの中で持っていかなきゃいけないという長期目標がある中で、私たちが今、どういうふうにしていったらいいのかを、真剣に考えなければいけないので、もし業態を変えてもらわなきゃいけないような業者さんがいらっしゃるとしたら、それは、20年、30年の間に時代が変わっていくよということを伝えながらやらなければいけないというふうな感じが、私はしております。

金藤副座長 それも分かります。ですので、ここの施策を考えるときには、今までもたぶんそうだったと思うのですが、私が最初言ったのは、たぶん究極的なシナリオだと思うのですよ。たぶんできない。

けども、ただそういうシナリオごとに物事を考えていって、今、我々ができることはこのあたりだということ、しっかりとみんなで考えていかないと。確かに、末端のほうでそういった状況であることは、私もよく理解しています。ただ、理解しているからこそ、やっぱりそういったものも考えないといけないのと、区としてというか、こう関わっている人たちも含めて、共同で取り組みますということを考えている以上、その共同というものを通して、最適な施策やシナリオ分析をしながらやっていかないといけないのかなど。ですので、何が言いたいかという、これだけの資料で、なかなかそこまではたぶん議論はできない。

庄司委員 今、金藤先生が指摘されたところ、1つの今後考えていけなくちゃならない問題点だとは思いますが。ただ、当面、千代田区としての、市町村としての、あるいは国としてでもいいのですが、現状での廃棄処理の政策をどうしていくのかっていう、その視点から見た場合に、ごみ処理政策が、例えば、過去50年の間に随分変わってきます。特にごみ減量を強く言われ始めた20世紀末あたりは、とにかく東京に関して言えば、処理施設がもう全然足りなくなって、不法投棄を含めて不適正処理がもう、防ぎようがなくなった。これでは困る、大変だということで、まず第1段階としては、適正処理の確保という言葉、これは課題になってきました。まさにそのために、廃棄物処理法が適正の確保っていうことと、衛生的に処理するってことだけで、ごみ政策が作られていましたけども、もうそれでは駄目で、適正処理をしなくてはいけないと。その適正処理をするために、埋め立て処分場がまず、だんだん少なくなっている。もっと加えて直接的には、大事な中間処理である焼却処理施設が全く不足している。ということで、そこから始まって、ごみを減らすっていうこと、その時点では、まだリサイクルって話もありませんでしたから、ごみを減らす。

その減らす手段として、燃やして埋め立てたら灰になるから、容積で20分の1、重さでも10分の1になる。埋め立て効率がよくなるから、とにかく燃やせるものは、なるべく燃やせるようにしようということで、可燃ごみ、燃やせるごみは燃やす。そのための焼却施設をとにかく造ろうということで、国も膨大な予算を付けて、補助金を付けて徹底的にやって、今、全国の焼却率は8割強までいっています。当時は、まだ半分もなかった時代です。各市町村も、とにかく焼却場に回して、少しでも灰にすればいいからということでリサイクルを始めた。古紙を回収、びんを回収、缶を回収する。それはリサイクルを目的じゃなくて、結果としてリサイクルはなったけれども、あくまで埋め立て処分場に持っていかなくて済むようにしようということで走りました。

それが進んで、もうその時代が一応、焼却施設も埋め立て処分場もある程度確保できた時点で、時代が進んでごみ量、そのものを減らさなかったらということで、絶対量を減らすようになってきた。リサイクルもそういう意味で進められるようになってきたっていう、そういう経過があると思うのですね。

ただ、さらに今、もう21世紀も20年近くたってきて、まさに脱炭素社会って、先ほ

ど崎田座長が言われたように、そういうことを考えるようになってきている。ごみ処理もその中の非常に重要な要素なので、そういうかたちで変えてかなくちゃいけないのだろうなど。

そういう意味で、それを含めた持続的社會をつくるためのSDGsなんていう1つの指標が国連でも作られてきて、そういう中で、ごみ処理政策を今後どうやっていくのか、そういう視点で考えなくてはならない時代に入ってきていると思うのですね。その中で、そういう長期的な視点になったときに、いわゆるごみに関わる産業の全体の日本の経済、産業構造の中で、どういう地位を占めて、やっていかなきゃならないかということになると思いますが、今取りあえず、そこまではちょっと議論できないと思うので、そういうことを想定して、ごみ政策をどうしていくのか、やっぱりごみ量の当面は、絶対量を減らしていくってということから、国もそうですよね。絶対量を減らしていく。なおかつその中で資源化率も上げていこう。

当然ごみ量が増えていくと、一番困るのがごみ処理業者ですよね。ごみ処理業者はどうしていくのだ。これは今までもあったことです。例えば埋め立て処分場どうしても造らなくてははいけない。東京なんか典型ですよね。埋め立てる場所がない。海面ぐらいしかない。東京湾しかない、東京港しかない。そこ、じゃあ海面潰そう。しかし、そこでは漁業権がかなり大きな問題でした。この漁業権はどうするのだ。漁業は駄目だよ、仕事を変えろと勝手に言っちゃっていいのか。それはできないですよ。で、何をしたかっていったら、漁業補償をしました。かなり、漁業補償していますよねと。漁業補償して何をしたかったら、その漁業者たちのかなりの部分はごみの収集運搬に変わりました。それを補償として出しましたね。それは同じようなことは下水道でもありましたね。ですから、部分的にはそういうかたちで、ごみ処理業者に関しては、補償していくってということも、これから視野に入れていかななくてはならないでしょうけど、取りあえず審議会の中では、絶対量減らす、まだ段階だろうというふうに思いますね。で、その中で資源化率を上げていくことで、僕はいいのかなとは思いますが。

崎田座長 いろいろ意見交換が進んでありがとうございます。今の私も、1つだけ。今、ごみと資源の総量をできるだけ減らしていく社会にしていくってというのが、すごく大事です。先ほど金藤先生がおっしゃった、ごみと資源の総量Hというのは、できるだけ減らしていくという方向の中で、その中のGをできるだけ増やして、ごみのほうを減らしていくか、そういうような中に、どう持ってくかっていうところが、今求められているところだと思います。

金藤副座長 たぶん分母の部分の、そのCの部分のがっと減らさないと、資源化量は増えないなって。率は上がらないなというふうに、今ちょっと計算していたということです。

崎田座長 いろんな意見をどうもありがとうございます。

それで、皆さんに、今までのお話をまとめておくと、まだ家庭系や事業系から燃やすごみとして、出しているものの中に、資源として出せるものもある。そういうものをしっかり分けてもらう、それをしっかり分けてもらうことも大事だし、もう一つは、今まで分別の資源化の分野にしてなかったもので、新たに分別したほうがいいものもあるのかどうか。その両面を考えたほうがいいのではないかというご指摘もありました。まだ資源化できる

のではないかというものの中に、プラスチックとか紙とか、あと、食品廃棄物がありますが、まだ食べられるのに捨てられている食品ロスというのが課題になっている。この3つを、しっかりもう少し考えてもいいのではないかというようなことが、出てきております。で、家庭系と事業系、両面からどうできるのか考えてもいいのではないか。で、その中に、今までの区分のものをしっかり分けるのか、あるいは新しいものを増やすのかっていう、そういう2つの視点もあるだろうという。今出たのは、大体こんなご指摘かなというふうに思います。

せっかく皆さんに資料としてお渡ししておいたがあるので、それだけ簡単に情報提供してから、千代田区でどんなことを最初にやったらいいのか、皆さんから忌憚のないご意見を少しいただけたらなというふうに思います。

この資料5は、これからの審議に直接関係するかどうかはわかりませんが、最新の情報として、皆さんにお伝えしておいてもいいのではないかということで、資料をご用意いただきました。これが今、いろいろ報道などでもされているのですが、環境省の中央環境審議会の循環型社会部会で実施されています、プラスチック資源循環戦略小委員会というところの内容の本文そのものがこうなるだろうというものが、資料1です。あと、プラスチックを取り巻く国内外の状況というのが、非常に簡単どころですが、抜粋をしていただいたのが参考資料集で出ています。

この資料1がどういう意味付けかは、実は何回かの意見交換を踏まえて、今、公表されている最終バージョンがこれです。4月に循環型社会部会のこの委員会の親会が開かれて、ほぼこれと同じようなものが、委員会のまとめとして国に出す予定になっています。

それを踏まえて、国で細かい内容を作っていると、6月のG20があるときに、やはり今、世界各国が、非常に海洋プラスチック問題を入口にして、使い捨て型のプラスチック容器包装が、世の中で大変多いということに関して、もっと警鐘を鳴らして、各国がしっかり産業界も含めて取り組んでいかなければいけない時期にきている。安倍首相もいろんなところの委員会で、しっかりとテーマにしますみたいにおっしゃっている以上、しっかりと提案してかなきゃいけない状況です。

少しこの取り巻く国内外の状況という参考資料1を先に見ていただければと思うのですが、ちょっと開けてみていただくと、プラスチック資源循環戦略の概要というのが出ています。背景としては、廃プラスチックの有効利用率が低い、海洋プラスチック等による環境汚染が世界的な課題になっていると。我が国も国内で適正処理、3Rを推進して、国際貢献も実施すると。

実はその中で、下に書いてあるいろんな項目を話し合ったのですが、どれもかなり話し合ったり、技術開発しないとなかなかできないことも多いのですが、まずライフスタイルの見直しで、資源を効率よく使うリデュースがありますが、ワンウェイプラスチックの使用削減、レジ袋有料が義務化等の「価値づけ」と書いてありますが、割に時間がかかる施策なのですが、ライフスタイルの見直しやビジネススタイルの見直しに直結するような、明確な施策も入れておかなければいけないという議論の下に、そこで明確に出てきたのは、いわゆる使い捨て型のプラスチック容器包装の使用削減、具体的に言えば、レジ袋有料化の義務付けというようなことを、しっかりと入れていくことが盛り込まれています。

なぜレジ袋だけを問題にするかというのは、いろいろな意見交換がありましたけれども、レジ袋だけが駄目というわけではないのですが、もう10何年前から容器包装リサイクル法の見直しの過程の中で、私たちのライフスタイルの見直しとか、ビジネススタイルの見直しのきっかけに、買い物をするときの消費行動のところを、レジ袋ではなくて、マイバッグを持って買い物に行くところを定着させることから、みんなで考えていこうということで、もう10何年のそういう社会運動みたいなものがあるわけですので、それでも、まだ今、都道府県の中できちんと協定を結んだり、提携しているのが4割程度という状況の中で、ここは明確に義務化しましょうというようなことが、明確にうたわれています。

背景として、一番上のひし形の2列目の後ろのほうに、世界で2番目の1人あたり容器包装廃棄量、アジア各国での輸入制限等の課題とありますけれども、今、日本は既にいろいろなリサイクルの仕組みができていますので、アジア各国のリサイクルの仕組みがないような国に比べれば、いわゆるプラスチックが海に流れていって、本当に自然生態系に迷惑を掛けているみたいなものことから言えば、世界で30位ぐらいなのですね。一応、そういうデータもあるのです。

ただし、1人が使う、使い捨て型の容器包装プラスチックの量から言うと、アメリカに次いで世界で第2位というデータもあるので、やっぱり多量消費国として、しっかりそこを考えたほうがいいということで、きっと早急に進むと思います。進むと思いますというよりも、2020年に東京オリンピック、パラリンピックがあるので、これをきちんとやるのだったら、2020年の春にはスタートさせたいというのが、国、あるいは東京都のほうの気持ちというのがあります。もし、法律の制度化が遅れば、東京都のほうに先をやり始めるだろうと思いますし、両方が協調して、2020年にスタートという感じになるかどうか。今、時間的にはぎりぎりのところかなというふうな感じがしています。

そこが、まず明確に出てくるというのと、あと、リデュースのところと、次がリサイクルで、その次に、いわゆるリサイクルをして、もう一回リサイクルにするようなボトルトウボトルとか、そういうような技術的なものをきちんと入れていく。あるいはもし、他に流れていってしまっても、いろんなことに迷惑掛けないような成分耐性であるとか、バイオプラスチックとか、いろんなものを研究開発してもっと進めるとか、実はこのバイオプラとか再生材を高度化していくような、この辺に研究費がものすごく200億ってすごい金額が、来年あたりから出てくるのではないかなというふうに思います。

その次が海洋プラスチック対策として、本当にポイ捨てとか、マイクロプラスチックの流出の調査をはっきりさせるとか、この辺をもう少し明確にしていくっていうこと。これは日本の問題だけではない、世界に貢献しなければいけないので、国際展開というようなことで考えています。

では、一体どんな目標、右のほう見ていただくと、マイルストーンって書いてあるのですが、これは何かというと、今、世界各国が、このプラスチック問題は積み上げではなくて、もう明確に目標を決めてやっていくのですね。CO2削減も今、そういう感じなのです。同じように世界各国から、非常に、こういう社会にしていきたいという大きな目標を立てる。ですから日本も、まだ産業界とかいろんなところと話し合いが足りてはいないのだけれども、日本も積み上げ型ではない目標設定型のかたちでやらなければいけないので

はないかということで、マイルストーンという目標にしていく道筋を、マイルストーンという言い方で、今回書いています。これがいわゆる目標型の数字で、2030年までにワンウェイプラスチックを累積25%排出削減する。2番目が2025年までに、リユース・リサイクル可能なデザインにする。2030年までに容器包装の6割をリサイクル・リユースする。2035年までに使用済みプラスチックを100%有効利用する。2030年までに再生利用を倍増させる。2030年までにバイオマスプラスチックを200万トン導入する。これが現在4万トンぐらいしかないのに、あと10年で200万トンって、これはちょっと無謀なのじゃない。そういう意見もすごく多いのですが、下に書いてあるように、アジア太平洋地域をはじめ、世界全体の資源環境問題の解決のみならず、こういうことをやることで、新しい経済成長とか雇用創出、持続可能な発展に貢献するような仕組みにしていくと。世界各国との連携を通じて、目標を達成することで、必要な投資やイノベーションを促進して、新しい環境分野のイノベーションを起こしていくのだと、こんなことが、この戦略の中に書いてありますので、時間があるときにでも目を通していただければありがたいなと思います。

さっき私がお話しした、レジ袋の有料化のところのお話が、4ページの真ん中辺。プラスチック資源循環戦略の1番。プラスチック資源循環の①。リデュース等の徹底というところの最初の印の辺りに書いてあります。無償配布をやめ、価値づけをするというふうに書いてあります。そういうようなかたちで、ここに出ています。

その下は、実はこういうことに関心がある方は、会議に出てきた資料集というのがあるのですが、実は約100ページ以上あるということで、今日お配りするのはちょっとあまりにも無謀かなと。今産業界とか、いろいろ自治体とかいろんなところで、このプラスチックスマートという言葉を出して、先進事例を登録して、みんなで普及するような場を作っていきたいというようなことを言っています。

最終ページ、SDGsの表が出ていますけれども、こういう話です。2015年に国連で採択されたSDGsで、もうかなり関係したことが言われていまして、ゴール12。目標12の持続可能な消費と生産というところに、いろいろ書いてありますが、こういうところにも資源のきちんと効率的な活用。ゴール14は海洋資源の保全とか書いてあって、やっぱりこういうことに貢献するということです。なお、1つプラスすると、ゴール12の3を見ていただければ、2030年までに、小売・消費レベルにおける世界全体の1人あたり食料の廃棄を半減させ、収穫ご損失などの生産・サプライチェーンにおける食品ロスを減少させると、この辺が2030年、2000年レベルの食品ロスを半減するという日本の第4次の循環基本計画の基になっているとご理解いただけたらと思います。

家庭系については、2030年までに、2000年レベルの半減。事業系に関しては、食品リサイクル法の見直しの審議が先日何回かあって、半年ぐらいやったのですが、まとめて、同じように2030年に半減というところが、事業系も出ているというようなことです。ですから、食品リサイクル法は今、報告義務のある年間100トン以上のところが真面目にやっている状態ですが、地域の中小事業者さんも、取りあえず、そういう全体像の中で、しっかり取り組んでいただくということが、これは国全体がサプライチェーン上げて取り組む目標ということです。それを超えなかったら何か罰則があるのかという、

そういう話にはなっていない。ただ、サプライチェーン全体で、事業者も取り組むと、そういうようなかたちの国家目標というか、社会全体の目標というかたちになっています。食品ロス削減に関しては、そういうような状態です。ちょっと情報をさせていただきました。

一息入れていただいて、これが最近の状況で、プラスチックと紙類と食品ロスあたりは、今日のデータを見ても、かなり影響するかなというところでは、千代田区でどういうふうにしていったらいいのか。今日で話が全部まとまるっていう話ではないので、皆さん忌憚のない、こんなことができたらいいのではないかとか、こういうふうに協調できたらというところを、ざっくばらんに言っていただくことで、事務局の皆さんにそういうことをうまく生かしていただくようなかたちで、意見交換ができればなというふうに思っています。

高橋さん、いかがですか。何かご意見を、どんな視点からでも結構です。

高橋委員 組成分析調査の資源化できるものを見ると、家庭系ごみも事業系ごみも、紙類というものが、その資源化可能なのに燃やされている量が多いという報告があります。何が一番多いのかなと思って、細かい小分類を見ますと、資源化できるダンボールが、結構多いのだなという感じがしたのですが、ダンボールって結構多いのですか。

区関係者 ダンボールは、本来は資源としてダンボールを出していただくのですが、やはり宅配関係が多いので、非常に多いです。

ダンボールといっても、大きな箱ではなくって、郵便小包みたいなちっちゃいものも全部含めたかたちで資源にできるのですが、そういったものが含まれています。

高橋委員 通販が多いので、ダンボールはこれからはますます増える感じがして。

区関係者 それで、1点あるのが、これはちょっと職員の私見ですが、郵便、パックみたいなかたちになっていますと、上にシールが貼ってあるのですよ。あのシールを個人情報だということで、剥がさないでそのまま入れる方が多いですね。燃やすために。あれを人に見られたくないと。あれは、本当は剥がれるのですが、その部分の個人的な考え方があのようなようです。

高橋委員 そのシステムとして、小さなものから大きなものまで、うまく回るようなシステムを作ることが可能になると、このもったいないダンボールとかそういうものを…。

区関係者 あと、たぶん千代田区のほうの特性だと思うのですが、世帯数の構成人員で、1人世帯の方が高い部分がございます。それと、燃やすごみを本人が出すときに、分別がしづらいというか、面倒臭いという考え方が多くあるようで、やはり燃やすごみの中に全て入れてしまうところで、1袋にして出す傾向が多く見られます。

高橋委員 個人的な感想なのですが、私も結構通販で結構買い物をするのですが、ダンボールを、やはり捨てるのがとても大変で、潰すのも大変だし、いろいろ大変なのですが、玄関口に届けられたときに、名前のシールが簡単に外れて、欲しいのは中身だけなので、外側は、持ってきた業者さんが引き取ってくれば便利なのに。

区関係者 千代田区の場合は、引っ越しのダンボールについては、区では原則収集しないとっております。要は売買とか、引っ越しのときに新しいダンボールを何十個は無料でプレゼントするというやり方で、古いものをお渡し、それ以上は、有料というかたちで引

っ越し業者さんはやられている部分もあるのですね。そういったものに活用してもらうために、引っ越し業者さんのほうに引き取ってもらっているところはございます。

高橋委員 何かそのダンボールをはじめとした、小型小包なども含めた、そのものをうまく回収ルートに乗せるような全体的な仕組みがあると、結構簡単に減らすことができるのかなど。

伊藤所長 分別の方法につながってくるのかなとは思いますが。千代田でも、ごみ分別アプリとか、そういったものを作ったり、ホームページでも展開しているのですが、なかなかうまく分別までいってない状況ではあります。

崎田座長 あと、雑紙の回収を徹底するのが、まず、第一みたいなことで、いろんなところが今、やっておられますけど、千代田区の場合、雑紙はどうするのですか封筒に入れて、雑誌なんかとまとめて出すとか、どういうかたちの。

区関係者 紙袋等に入れて、雑紙だけをまとめて入れられて、出している部分もでございます。ダンボールは回収しています。引っ越しで一時的に大量に出るものを、そのまま再資源に使えるので、そういったものはリユースをしてくださいます。

ダンボールとして出たものについては、回収はしております。

崎田座長 ダンボールとか雑誌とか、形が一律でたくさんあるものは、割にその日にきちんと出してもらえれば、集められると思うのです。割に今、紙パックの回収率も悪いですし、その他の紙類のお菓子などの紙箱とか、窓付き封筒とかトイレットペーパーの中の芯とか、この辺をもっと徹底して集めるというようなことを、苦勞しておられる地域も本当増えてきています。今、試みとしては、特別に資源回収用の袋を普及啓発用に配って、その袋にどんなものをどういうふうなかたちで出してくださいというのを印刷してあるような、そういう雑紙とか、古紙の細かいものを回収するための袋を、1回配ることにより慣れてもらって、その後は自分でやってくださいと。

先日も他の地域で、新しく普及啓発用に作りましていうのは、結構今、ちょっとはやりがありまして、23区の中でも、私がたまたまいただいているのは、港区さんと荒川区さんのがあります。あと、そういう袋を作らなくても、ごみの分け方にきちんと書いてあるのですが、もっと丁寧に古紙の回収のところだけを1ページ、きれいに、細かく書いたチラシを作って配布するとか。

実は、八王子市さんとかいろんなところで、NPOのほうで自治体と一緒に社会実験をやったことがあるのですが、大きなアパートとかマンション全体に、そのチラシを1回配って、排出量が増えるかどうかをやったときに、松本市とか八王子市とか武蔵野市とか、町田市とかいろんなところで社会実験をやったのですが、1週間、2週間で1.5倍ぐらいに増えている。そういうデータが出ているのですね。だから、1回そういうのをチャレンジして、今のままでいいから、きちんと普及啓発してみるのも有りかもしれないです。

金藤副座長 高橋委員の宅配の通販のときに出てくるダンボールという話なのですが、これがうまく機能すればいいなって、ぼーっとテレビを見ていたときがあって。最近、各駅に宅配ボックスってあるじゃないですか。あれ、たぶん箱ごとポボンと入れられている。あれをうまく、業者さんに考えてもらって、中身だけを取り出したかたちで置いてもらって、中身だけがあるので、たぶん鍵は開けられませんよね。その分だけダンボールが少な

くなるので、そういうかたちで、うまく活用するやり方は有りなのかなと、今ちょっとお話を聞いていて思ったのですけども。

崎田座長 そうすると、例えば、宅配をやっているようなクロネコヤマトとか、佐川とか、ショッピングのアマゾンですかね。ああいうところに提案をして、例えば、そういう宅配ボックスの前で開けるっていうのをオッケーっていう、送り方を1つ作ってもらって、その中身だけ、中に入れるってことですよね。それで、そのボックスは持って帰ると。それも1つの提案かもしれないですね。

窪田委員 千代田区からうまく発して全国に。

崎田座長 千代田区からの提案で、それもいいかもしれないですね。

金藤副座長 無駄に箱が大きいのですよね。これだけしか本ないのに、箱だけがものすごく大きい。

窪田委員 すごく大きな箱で、中に、緩衝材が入ってきて、もうなんか全部ごみだって感じるときあります。

金藤副座長 なんかもったいないなって思うのですよね。あんなことするのだったら、お金を他のことに使えばいいのに。

窪田委員 でも、紙ごみだけを燃やすところから引き出すっていうキャンペーンを、総論的にごみを減らすってことじゃなくて、この紙ごみを燃やすごみから資源に回すそういうキャンペーンだけでも、重点的にやろうみたいなかたちがあってもいいのかもしれない。

崎田座長 そうですね。

窪田委員 総論的に減らしましょうというよりも。

崎田座長 おっしゃるとおりですね。紙ごみを燃やすごみから資源だという。

庄司委員 今のおっしゃるとおりだと思うのですね。ごみの出し方は、いわば生活、ライフスタイルで、もうどんどん日々が変わっていきます。だからごみの性状も変わってくるし、ごみの出し方がまず家庭ごみを含めて変わってくるのですね。だから、そういったことに対応した、いろんなごみの減量にしても分別にしても、キャンペーンをしていかなくちゃいけない、まさにその1つの具体的な特に緊急に考えなくてはいけないのは宅配、通販が、本当、僕なんかでもごみを出す、資源を出す日に幸い最近、こんな小箱があるとき、ふわっと増えてきたのですよ。これは、何なのかなと思って、最初気付かなかったの。これ、たぶん通販のことなのだなと。ですから、これは一時的ではなくて、全国的な共通な問題だと思うので、これは具体的に、個別に対応する方法も考える必要があるわけですね。

それともう一つ、より大事なのは、これはすぐにどうのということではないのですが、これまでの分別は、あくまでごみ処理、ごみの片付け、燃やせるものは燃やすようにしましょう。燃やせないごみと分別しましょう。資源に分けられるのは全て分けましょうということだったのですが、もう少し広い視点で、まさにこのSDGsは、脱炭素社会ということが前提にあります。その意識は、まだ全然広がっていないですよね。世界的にも広がらないと、日本なんかは特に僕は遅れているのではないかなとは思いますが。

ですから、その辺を踏まえた、これからの後片付けじゃないよと。脱炭素社会イコール資源化するという、減らすということもそうですが、資源化することは、後片付けで

はなくて、ものづくりになるのですよね。だから分別、選別を非常にしなくてははいけない。それで、これプラスチックも、今後本格的にやっていくのだったら、膨大なリサイクル対象のプラスチックが出てきます。それが出てきたときに、今の容器包装でやる分別を前提にしたら、とてもとても太刀打ちできません。というのは、リサイクルを活かすには、それが再生資源化されて商品にならないわけではないが、そのためにはコスト削減されないと商品にはならないですよ、手間を掛けて分別しても、下手したら埋め立て処分場に、あるいは焼却されるかたちになりますから、それを考えると分別の在り方そのものを変えなくてははいけない。ただ、これは市町村単位で考えることじゃない。国全体で考えなくてははいけないのでしようけれども、そのぐらいのことを、近々恐らく、今のごみ処理基本計画ではもう間に合わない。たぶん、この中間の見直し、あるいは中間の見直しも間に合わないぐらいと、僕は見直しを求められるのではないかなと思います。

特に、SDGsのこの目標とは、まだほとんど散発的に出ているので、これは具体的なごみ処理とはつながっていませんけれども、きちんとごみ処理に反映しろとポンと出たら、今の処理基本計画をかなり見直していかなくちゃならないですよ。そういう時期に来ているのだらうと思うのですね。

なんとしても、個々の市町村で取りあえずできることは、そういった今までのような分別とは発想を変えた時点での分別が求められているので、そのことも含めてキャンペーンを張らないと、なかなか何でこんな面倒臭いようなことやる。ごみの後片付けとして考えたら、いいじゃない、燃やしちゃったほうが楽じゃないのということになっていますから、そこは、これからの市町村の大きな緊急の課題だと思いますけどね。

崎田座長 今、庄司委員が、例えばプラスチックの話にしても、一番最初にご発言していただいたように、重さに比べて量が大きいという話で、例えば、今は容器包装だけですが、本当はよく見ると、おもちゃであったり、そういう製品プラスチックといわれる部分のも多いですので、本当にプラスチックは容器包装だけ分けて集めればいいのかも、すごい課題になっています。

先ほどお配りした戦略の5ページのところに、効果的・効率的で持続可能なリサイクルと書いてあるのですが、リデュースの後リサイクルなのですが、今のご発言のように、きちんとリサイクルするにしても、いろんな資源をどういうふうに全体的に集めてやるのか、あるいはそのリサイクルに関しても、それをもう一度しっかりと何に使うか見えるようなかたちで質を高めていくような、しっかりとした再生資源を使っていくようなリサイクルとか、そういうこれからのリサイクルに関しても、かなり高度化してく必要があるのではないかみたいなことを、かなり問題に出ていますので、今のご発言のように、1～2年ぐらいで、やっぱりこういうところも明確に出てくるのではないかなというふうに思います。ありがとうございます。

今のように、リサイクルしましょう、ごみを減らそうというところから、発するだけではなく、少ない資源をしっかりと使っていきましょう！みたいな、もっと明確にしていくということですね。ありがとうございます。

もう一つ情報提供ですが、オリンピック、パラリンピックで都市鉱山メダルでは、皆さん、本当に自治体にご協力いただいて、ありがとうございます。私がお礼言うのもあれな

のですが、仕組み作りに関わった者として、ようやく今年の3月31日で、もうそれは終了していただいて大丈夫。ただし、やはりせっかくいろんなところがボックスを受け取ってくださって、そういう小型家電の資源回収とかやっていただくことが定着したので、オリンピックのレガシーとして、少し違うシールをお配りして、それを使って活用していただく。レガシーとしてうまく定着させていただくとうれし、そういうことで、資源をきちんと使っていくことを明確にするのが社会ですごく大事なところかなと思います。ありがとうございます。

皆さん、ガンガンいろいろとおっしゃっていただいて、中山さん何か。今いろんなご意見ある中で、まだまだこういう話が出てないねって。

中山委員 あまりにも規模が大きすぎて、なんか下町で暮らしている親父にとっては、あまりにもあれなのですけど。最近、よく私ハワイ行くのですけど、ハワイは今、お店で一切プラスチックバッグはないのですよ。本来品物だけを渡されて、自分たちがエコバッグ持って帰る。どうしても紙が欲しい人は15円で、わざわざ買うのです。シャネルだとかって有名なところは出すのだけど、普通のABCマーケットみたいなところは、自分たちでエコバッグに入れて、抱えながら持ってくるような状態になっている。ハワイはさすが場所が狭くて、焼却場も山奥のところには1個しかないの、ごみの量を減らそうと思ったときには途端にやるのです。

だから、オリンピックに向けてと、今座長が言われたみたいに、思い切ってスーパーで出す袋も、一切紙にしようと。ハワイは全部紙ですから、そのぐらい思い切ったことで、パッとやらないとできないし、そういうことやった日本って素晴らしいと言われるのかなと思います。

あと、座長が言われたみたいに、資源ごみがあるのですけど、千代田区は週1回しかない。その燃やすごみのときに、例えば大きなバッグがあって、それに資源を入れれば、それでもう持っていってもらえるような。大変なのかもしれないですけども、今、千代田区はマンションが多くなっていますので、うちの町会なら町会だけど、120世帯のマンションが、50だ80だとかってあるのですよね。だから、そういうマンションの人たちのところは、きちんと管理人さんがいて、ごみをきちんと分別しています。ごみの集める場所もあるので、その町会の人たちが、そのごみを減らそうという意識があれば、私は町会長をやっているのですけど、そういうことを、町会で慣らしながら、資源ごみは週1回しかないけど、例えばマンションのあそこへ行けば、資源ごみは持っていけるよとか、そのコミュニケーションをつくる中で、適正な分別が浸透していくのかなと、ちょっと思いました。

崎田座長 今、毎日出していただく方が出しやすいように、ちゃんと情報を出すというのは非常に大事なことで、特にマンションだったならば、保管場所があるので、週一回の回収でも住民の方はいつ出しても大丈夫となっています。

中山委員 マンションと協調できるといいなって、ちょっとお話聞きながら思いました。

崎田座長 そうですね。ぜひマンションのそういう集め方も、うまくやっていただくようなかたちは大事だと思います。

で、あとその前におっしゃった、ハワイは今もうエコバッグですよっていう。

中山委員 紙だけです。

崎田座長 紙か、自分で持っていったエコバッグに入れてもらう。

中山委員 そうです。

崎田座長 そういう感じですね。

中山委員 もう昔は小さいプラスチックバッグで、ただでくれたのだけど、もう一切プラスチックは使わないと。周りに海があるので。

崎田座長 そうですね。そういうのが、どんとできるとチャレンジできるといいかなと思います。さっき来年の2020年ぐらいから、東京あたりは、ぜひできるようにという話をしましたけれど、どういうふうなやり方にしないといけないみたいなことっていうのは、出てこない。出てこないというとな変なのですが、先にやり始めたところを、そのやり方じゃ駄目ですよ、なんていう話には絶対ならないはずなので、どんどん先にやって、世の中牽引しちゃうというのも手かなという感じはするのです。

もちろん、事前に今、東京都と相談したり、情報交換ながら、2020年ぐらいからスタートしていく、それは1つの見識かなという感じもします。

皆さんに、積極的にいろいろお話しただいて、ありがとうございます。あと10分ぐらいで、今日締めていかなければいけないのですが、言いのがしちゃったなっていうのがあったら、ちょっとここで言っといういただければ。

窪田委員 プラスチックの問題は、すごくこれから大きな問題になってくると思うのですね。ピンポイント的でも。今でもテレビでとかでやっている、ストローをやめましょうという、すごく矮小化されたコマーシャルになって、マイストローを持ちましょうとか…。もうちょっと大局的に見て、皆さん、それこそレジ袋をやめましょうっていうこととリンクすることなのですが、なんかストロー持ったらすごくトレンドィだよみたいなところがある。そのストローが象徴的なもので、何でストローを取り上げたのかなって思うぐらいに、私なんかストローなんかはほとんど使わない。そういう面では、社会にこの問題を広めていくための切り口としては、もうちょっと大事なところはここなのだよということを押さえるような取り組みをしていただきたいなと思っていました。

崎田座長 ストローは、やはりこの問題がEU諸国中心になったときに、ウミガメのお鼻からストローが出てきたという、あの映像がものすごくインパクトが強いので、あと、EUの海岸沿いでどんなものがクリーンエイドすると、どんなものが出てくるかという、組成調査したトップテンというのがあるのですが、やっぱりストローが結構高くて、そういうのがかなりEU諸国の場合には具体的に言うことでインパクトがあるのですね。でも、日本の調査はまた違うものが出てきますので、日本は日本の調査で明確にやっていく。ストローというのは、グローバル企業が世界戦略の中でそういう指示があって、そういうところは日本でもやったり、その情報を聞いて、熱心なところはやり始めるという感じなので、それを否定するとせっかく…。

窪田委員 否定する気は全然ないのですが、ただ、一般の日本国民に知らせる切り口としては、もうちょっと違うのがあるのかなって気がしました。

崎田座長 それを入口として、暮らしの見直しに広がっていくってことが、すごく大事なっていうことですよ。

窪田委員 はい。

崎田座長 ありがとうございます。皆様のご意見、前半は取りあえずプラスチックと紙類と食品ロスと、この辺が課題としてあるけれども、家庭系、事業系、それぞれが大事で、なおかつ今のやり方でもっと資源化するのか、新しいものを増やすのか、そういうことを考えてくというようなものの上で、話し合いをしたのですが、結構、紙がすごく出ているというお話で1回盛り上がりまして、今年は紙で特化してやるぐらい集中してもいいのではないかというご意見もあって、特に宅配でたくさん来るものを、ちょっと事前に持ち帰りしてもらおうような提案も有りじゃないとか、いろいろお話いただきました。ありがとうございます。そういう紙、やはり回収されていい紙類というものは非常に多いという話。

それと、プラスチックのところですが、いろいろプラスチック、普及啓発としてはもっと総合的な問いかけができるようにしたほうがいいということですが、具体的にやり始めるのったら、ハワイなんかもかなりやり始めているということですので、積極的に考えてもいいのではないかというようなことがあります。

食品ロスに関しては、後半の意見後半で特に出てこなかったのですが、これはもう重要性をいろんなところで言われていて、いろんな取り組み、特に外食産業の食品リサイクル法ですごく課題になったのは、外食産業、メーカーとか小売店はそれなりに大規模なところは、徐々に少しずつはやり始めてきて、なかなか取り組みが進まないのが、地域の中小規模の外食産業からの食品ロスと、食品廃棄物というあたり。そこが一番大きな課題でそれを支援できるのは、やっぱり市民や市民団体であったり、自治体だったりとかその辺のやっぱりきっかけをつくる、普及啓発としては大事、大変重要じゃないと言われていきますので、そこもしっかりと継続的に政策きちんと考えていただくのも重要なというふうに思います。

今日は途中経過ということで、調査結果を拝見しながら、こういう意見交換をさせていただきまされたけれども、うまくこういう意見交換も活用しながら、また2019年に取り組んでいただければありがたいかなというふうに思います。

という感じで、お話をまとめていきたいなというふうに思いますが、これで大体終了させていただきたいなと思うのですが、まずは事務局のほうで、これを受け止めて、一言お願いできますでしょうか。

伊藤所長 幾つか意見をいただきありがとうございました。千代田区としても、できるものを積極的に取り組んでいきたいと思えます。また審議会に報告等させていただきます。よろしく申し上げます。

崎田座長 ありがとうございます。部長何か。

保科部長 本日は皆さん、お忙しいところ、大変貴重なご意見賜りまして、ありがとうございます。実は平成12年、清掃事業が各区に移管になりまして、二十三区区長会の課題になっています。実は清掃工場について20年でそろそろリニューアルをしたい。ご案内のとおり、東京一極集中とか、1人暮らし世帯が多いなど現状はあるのですが、今後清掃工場の建て替え等々ですね、いわゆる予備率と言うのでしょうかね。余力がいる可能性があるということで、23区全体といっても、ごみの減量をしていかなければいけない。

これは至上命題です。

今千代田区の置かれた状況は、千代田は中央清掃と港清掃にごみの契約を結んでおりますが、清掃工場がない。当然、燃やしていただくために、お金を払っているみたいな状況になっています。

ですので、家庭系につきましては、人口は増えているのですが、微減傾向。ただリサイクル率、資源化率が非常に低いので、ここはもう引き続き力をお貸しいただきたい。それから今、事業系については、事業所数は増えてないのですが、事業活動が昨日あたりは大幅に日経平均の株が下がっているので分かりませんが、ごみの量が増えていると。特に紙ですね。あとは食品ロスの問題ですね。

これは先生方にはお話ししてないかもしれませんが、去年の優良建築物の表彰で、ミズノさんが社員食堂に、あれは蒸散型って言うのでしたか。食品の残飯の処理機を入れたのですよ。要するに残飯ゼロを実現している。それで、優秀賞を授与いただいています。

ですから、そんな取り組みもご紹介させていただきながら、引き続き普及啓発に取り組ませていただければと思います。

あとは、ストローの問題とか宅配の問題とか、できるところから少しずつですけども。

この一般廃棄物処理計画は、昨年改定させていただき1回目のご意見を賜るというかたちです。一応、中間目標が33年ということでございますので、また定期的に、この審議会を開かせていただきたいと思いますので、また進捗状況もお知らせして、いろいろなご意見賜りたいと思っております。今後ともよろしく願います。

崎田座長 あと途中でお話しするのを忘れてましたが、金藤先生、この地域のみらいくる会議とか、ああいうところもやっていますので、また皆さんとぜひ、いろいろ話を…。

金藤副座長 みらいくる会議は、来年度からまた再発足をさせていただきたいと思っているので、今お話しがあった、例えば食品ロスの問題とか、もろもろ含めて、新たなご提言をいただければありがたいなと思っています。ぜひよろしく願います。

崎田座長 よろしく願います。

崎田座長 最後何か、コメントは。

金藤副座長 今日ちょっといろいろと問題、再認識させていただきましたので、先ほども話に出ました、そのみらいくる会議で、こういった幾つかの問題点は議論させていただきましたと思っています。

崎田座長 みらいくる会議、いろいろ地域の方にご参加をいただく会議ですけど、できるだけ具体的に行動とか、そういうことが広がっていきけるような、何かそういう審議会と違う役割がきっとあると思いますので、そういうのを少し機能的な感じで運営していただければ。

金藤副座長 そうですね。昨年、前回よりもかなり主体的に動いていこうかと考えています。ただそれは、我々だけではなくて、本当に、私は、大学なので学生とか、それとともに、区にある事業者さんと一緒に、いろいろ物事を考えていって、より活動的にやっていければなというふうに、そういうふうに考えておりますので、こちらのほうもぜひ、乞うご期待という。

崎田座長 乞うご期待。

金藤副座長 なので、皆さんにもいい情報とか提供できればいいかなと思っていますので、よろしく願いいたします。

崎田座長 ありがとうございます。お世話になりました。どうもお疲れ様でした。

保科部長 終わった後ですけど、実は今、部長会で結構話題になっているのが、紙おむつなのですよ。

崎田座長 はい、すごく増えていますよね。

保科部長 子供の乳児の紙おむつと成人の紙おむつ、両方あって、これは、捨てれば確かに焼却かもしれませんが、結構な量なのですよ。重量もね。

崎田座長 パーセンテージからいってもすごいですよね。15%。

保科部長 確か、23区トータルだと、紙おむつ。紙の量が増えていたのですよね。何だっけ聞いたら、組成見ると紙おむつだって言われて。今、千代田の場合、分けて書いてありますけども、紙おむつの処理なんていうのは、…。

崎田座長 リサイクルとか、なんかそういうのを考えているという話を数年前に聞いたことがあるのですけど。

保科部長 国のほうでは、特に動きはないのですか。紙としては極めて上質な。

崎田座長 そうなのですよ。1～2年前に国土交通省のほうから、あれをそのまま流してもいいくらいなことができるといいみたいな、何かそんな話があったのです。

窪田委員 お話があって、びっくりしちゃった。

崎田座長 そう。そんなことは駄目みたいな、大きなブーイングがあって、その委員会はやめた、やめたっていうか、その委員会はなくなっているのですが。

庄司委員 ニュースで最近、ユニ・チャームが再生利用できるおむつを、開発したということで、どこまで実用化されているかは知りませんが、話題になっていましたね。

窪田委員 素材は何なのですか。

庄司委員 紙おむつって言っていましたよ。ちょっとよくは聞いてないのですが。

区関係者 たぶん、子供のおしっことかそういうのを取る部分のところが剥がれると。そちらは捨てて、他の部分は活用できて。

庄司委員 だから、そのおむつ処理のほうの行程が、その中に入るので、どこまでそれが商品として成り立つのかどうか。

区関係者 今、まとめちゃうじゃないですか。その部分だけを外して。

窪田委員 昔のおむつっていうとそうですね。布おむつみたいに

崎田座長 でもそれって大事ですよ。実は、孫が生まれてしまって、おばあちゃんとかに言われて、普段そんな話はしないのですけど、たまたま双子が生まれちゃったのですね。そしたらすごい量の紙おむつなのです。このくらいのボックスをちゃんと用意しているのですけど、1日の夕方になると、もう入りきらないみたいな状態で、ええっという感じで、ちょっとすごかったです。今、ちょうどおむつの時期が終わったので、ちょうど3年間ぐらいで終わるので、どうにかはなるけど、おっしゃるように、大人用も出てきていますよね。

保科部長 これから高齢化が進めば、数は減ることはないですよ。子供は減りますから、

若干減るかもしれないけど。

崎田座長 そうすると、今、ユニ・チャームがそういうのを開発したということは、他の会社もそろそろと思うので、できるだけ紙おむつもリサイクルできる紙おむつをご使用くださいみたいなことを啓発することもできるってことですよね。

保科部長 今、どうしても楽なので、パンツ式のやつのほうが。ただ、あれは、結構量が。簡単ですけど大きいですから。それごと丸ごと捨てちゃうと。

崎田座長 でも、確かにリサイクルできるのが出たときに、どこに持って行ってリサイクルしてもらおうかというのを、ユニ・チャームが会社で作るのですかね。

庄司委員 そこまでは詳しくは知りませんがね。

崎田座長 だってそうですよね。どうする。どこに持っていくことにするのかですよね。

窪田委員 だから、リサイクルというのは、それを回収して、次に何になって、私たちの手元に来るのかっていうことが明確にならないと、トイレットペーパーだって、出しても皆さん、再生品を買わないから。だから、再生紙を使ってもらわないことには、いっぱい集めても、私はもう新聞はちゃんと出しているからと言っても、じゃあ、ペーパーを変えますかと、うちはパルプ100%しか使わないからって、これでは何にもならないと思うのですよね。その辺の啓発っていうか、思い込みの刷り込みみたいのを、きちんとしていかないと。

崎田座長 ちょっと雑談。最近そういう会合をやったばかりで、いろいろ雑紙っていうか、本当に小さい紙を集めて、それをトイレットペーパーにするところが、最近よく出るのが、最後のリサイクル。紙って何度もいろんなものに変わりますが、トイレットペーパーの場合は、最後のリサイクル。みんな再生紙は固いとか高いとか思っているのですが、チェックのテストをたら、半分以上は間違いです。私も6つ触りましたが、合ったのは、2つだけ。

窪田委員 だから、なんか思い込みみたいなのが、若い方たちはそうでもないのかもしれないけれども、あって、やっぱり出したら次に製品化されたものを使うところまで意識を持たないと思います。

崎田座長 そうですね。トイレットペーパーのことで思い出しましたが、普通、なかなか資源にならないというものを、とにかく紙袋に入れて集めて、トイレットペーパーにしますという、そういうことよくいろんなところでやっていたけれど、今でもそれをしてくれる再生紙を作る業者さんがあるのですよね。だから、本当に地域に呼び掛けて、もう一回、その原点をやろうかなと思っているのです。

窪田委員 やっぱり本当の意味でのリサイクルをしないと、なんかトータルの意味で、ぼやけたリサイクルとうのが、日本人の感覚の中にあるから、リデュースが一番ですけど、これは社会規模になりますから、自分たちとしてはリユースを頭に置いて、リユースできないものは、リサイクルとかに回して、そのリサイクル品をまた使うことにしないと、出すばかりだと何にもならない。

崎田座長 結局は回ってないってことですもんね。

窪田委員 そうです。そうすると、そういう循環型社会を断ち切っちゃいますからね。だから出口と入口を、ごみは出口ですけど、ごみにしないとう入口のことをしっかり踏まえ

ていかないといけないかなと思うのです。かといって、全部私ができているわけではありません。

崎田座長 最近のマクドナルドでの試みを聞いたのですが、子供のセットって、必ずプラスチックのおもちゃを付けますよね。もう遊び終わったものは店頭を持ってきてもらって回収するとうプロジェクトを昨年あたりからやったそうなのです。半年か期限限定でやったら、予定の回収量、例えば14万トンぐらいをやろうと思ったら、17万トン集まったとか、予想を上回る量で、すごく会社もびっくりして、これは継続しようみたいな話になっていると聞いています。

窪田委員 結局みんな、関心は持っているのだけど、そのルートまで気が付かない。発信と受信とがうまくいっていないってことなのですか。

崎田座長 それで、そのプラスチックは、マクドナルドのお店で使うトレイの中に入れて、作るということで、ただし、その含有率が10%ぐらいと少ないらしいのですね。どうしてそんな少ないのですかって聞いたら、そのトレイをカラフルにしようと思って、今、緑のトレイを作っているらしいですけど、再生資源の含有率を高めると黒くなっちゃうのです。ですから、緑のトレイ見たら、あ、これは、リサイクルトレイだって思っていただけだと思うのですけど。なんか、海洋プラスチックの問題は、ああいうコカ・コーラさんにしろ、マクドナルドさんにしろ、グローバル企業の影響も大きいので、ものすごくいろんなことを一生懸命やって、社会に発信して、会社の責任を果たそうと、しておられる、そういういろんなことも応用しつつ、現実の様々なきちんとした仕組みがなっていけばいいなど。

崎田座長 それでは、紙おむつの話から話が発展してまいりましたが、本日は、ありがとうございました。お疲れ様でした。